

Bulletin 195

2006年6月号

平成3年4月16日第三種郵便物許可 平成18年6月15日発行(隔月15日発行) 第20巻第2号 通巻195号

広報から

支部広報委員長就任にあたって中村高淑建築設計事務所 中村 高淑 2

「地域が見えればもっと読みたくなる」を目指して
創和設計 櫻田 修三 2

関東甲信越支部のホームページを紹介します
日本設計 近藤 剛啓 2

地域の木材資源を地域の技術で地域の経済に役立てよう
ベル研究所 小田原 健 氏 8

はまっ子どうしJAZZ IN ユー・アール・ユー総合研究所 小澤 勝美 10

こだわりのディテール
閉閉式連続格子戸 鈴木アトリエ一級建築士事務所 鈴木 信弘 11

2005年度の保存要望活動について
金山真人建築事務所 金山 真人 12

建築相談員として考えさせられること
中照建築事務所 田中 照雄 13

神奈川県立保険福祉大学と鎌倉のN邸
石本建築事務所 南 知之 14

JIA市民住宅講座について くらかわプランニング 庫川 尚益 15

東京地域会は今 中山建築デザイン研究所 中山 信二 16

新宿地域会(略称・JIAS) 渡辺武信設計室 渡辺 武信 18

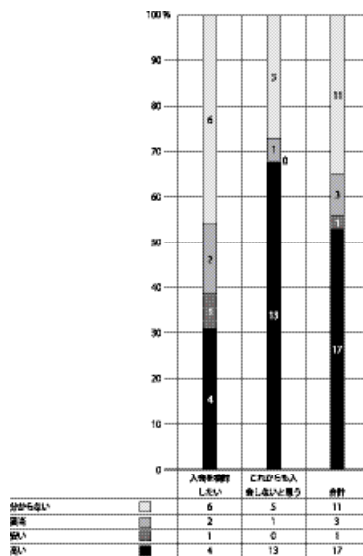
つくば30年の検証 のお設計事務所 内藤 彰 19

第15回学生卒業設計コンクール
宮本忠長建築設計事務所 荻原 白 20

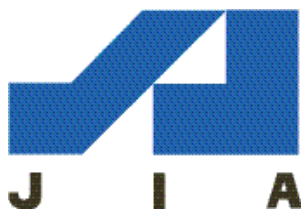
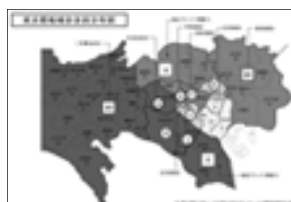
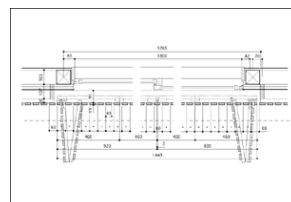
「学生卒業設計コンクール」+「学生課題設計コンクール」へ
核建築研究所 石川 純男 21

こんな本を読みました『まちづくり手帳』
イベントセミナー情報/編集後記 22

アンケート調査概要 3-7
アンケート回答者によるJIAへの意見 7



特集II 続・JIAの未来
非会員は何を求めているか



社団法人 日本建築家協会
The Japan Institute of Architects

関東・甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館
Tel: 03-3408-8291 Fax: 03-3408-8294

支部広報委員長就任にあたって



支部広報委員長
中村 高淑

新任の挨拶 2006年度から支部広報委員長を務めさせていただくことになりました。まだまだJIA経験が浅く未熟な若輩者にして、いきなりの大役に戸惑うことも多いのですが、知らないが故にできることもあろうかと、前向きに汗をかいてみたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

支部広報の主な活動と目標 (支部会報誌「Bulletin」の企画、編集、発行 / 「支部ホームページ」(会員向けサイト)と「建築家ON LINE」(一般向け)の企画運営、およびメールマガジンの発行) 印刷媒体とデジタル媒体をミックス、それぞれの特徴を活かして、会員相互(正会員・賛助会員・執行部)のインタラクティブな情報交換の場を提供することはもとより、広く社会との接点としても充実させていきたいと考えています。

社会に向けた情報発信 せっかくの良いコメントやイベントも世間に知られなくてはその社会的意義が半減します。内外に向けた意見交換の活性化と促進、特に一般社会に向けた情報発信や提言こそが今のJIAに必要なのではないのでしょうか。

例えば本部機関誌「建築家 architects」が広く社会にも情報を発信することを目指しているのに対し、本部が運営する一般向けサイトは

ありません。一般向けサイトを支部広報が運営しているのです。本部に先駆けて独自サイトを設けた地域会も多いと聞きます。外からみれば組織事情はさほど意識されないでしょうから、本部・支部・地域会の独自性を尊重しながら、垣根を越えた情報の交換や発信ができるように整備していきたいと思います。

建築家1人ひとりの意見を JIAは会員の1人ひとりが参加することによって成り立っています。諸先輩の功績やご尽力によって建築家の認知度は上がりました。さらに建築界を揺るがす社会問題が起きた現在、世間は聞く耳をもっています。

ベテランの皆さんはその経験と見識を社会貢献や後進のために、若手の皆さんは先達の開いた道があって今の自分があることを念頭に、共により良い建築の実現や自己研鑽に励みながらも個人だけでは成し得ないことの実現、そう、「建築家の職能の確立と地位の向上」を目指して、是非皆さん1人ひとりの声をお聞かせください!

中村高淑建築設計事務所

「地域が見えればもっと読みたいくなる」を目指して



支部広報副委員長
Bulletin編集長
櫻田 修三

もう1年、編集長を続投することになりました。2年前「顔が見えれば読みたいくなる」を目標に、地域会の声や取材記事に取り組んできました。前月号の新会員アンケートで、こっそりとBulletinがどの程度読まれているのかを聞きました。毎号読むが48%、時々読むも49%という結果に内心ほっとしましたが、できれば、毎号読むを80%にするには、どうしたらよいかを考えてみました。

群馬、茨城、長野、新潟地域会の支部広報委員がいません。地域の声を十分お伝えするために、ぜひ参加をお願いいたします。

連載をしたいと思っています。一般の方にも興味を持ってもらえるように、建築や街に興味を持っている作家や画家の方々に、投稿していただけないかと思っています。原稿料なしで、が厳しいと思うのですが。

Bulletinの在庫を無くしたいと思っています。非会員で執筆していただいた方、高校や大学、市民利用施設等に毎号お届けしたい。

委員会・部会の活動をお伝えして、新会員の入会活動を広げたいと思っています。

ホームページと協働して、情報を発信したいと考えています。

地域にきちんと根っこを広げて、養分をたっぷり吸い取って、大きく強く発信し、シリーズものはいずれ本にしたいと思っています。

これからも、ご協力をお願いいたします。 企業組合創和設計

関東甲信越支部のホームページを紹介します



支部広報副委員長
ホームページWG
主査
近藤 剛啓

会員向けサイトでは、支部のニュース・イベント情報、本部・支部、各委員会・部会、地域会・賛助会、会員からのお知らせを日々更新し掲載しています。

<http://www.jia-kanto.org/members/index.html>

「建築online」は、一般の方々向けに建築や建築家についての情報をお届けします。

<http://www.jia-kanto.org/>

「建築online」の中の特にアクセス数の多いコンテンツ

建築家とその作品を紹介するコンテンツ

<http://www.jia-kanto.org/online/architects/index.html>

写真家と建築写真を紹介するコンテンツ

http://www.jia-kanto.org/online/photo_gallery/index.html

建築家による本の紹介コンテンツ

http://www.jia-kanto.org/online/book_guide/index.html

ぜひ一度ご覧ください。また作品の投稿など会員の皆様のご参加をお待ちしています。また会員向けにメールマガジンを発行しています。ご希望の方は登録をしてください。「Bulletin」との連携、会員相互の情報交換、一般社会への情報発信のため、即時性を活かした媒体として整備していきたいと思っています。

(株)日本設計建築設計群

続・JIAの未来： 非会員は何を求めているか

関東甲信越支部広報委員会

非会員アンケートによせて

4月号のJIA新会員アンケートに続き、今回は非会員を対象にアンケート実施しました。限られた予算の中、広報委員会の草根ネットワークでアンケート対象を抽出しましたので、比較的サンプル数が少ないもののJIAに入会していない設計者の意識を垣間見るとい意味では貴重な資料となるのではないかと思います。今後のJIA運営の一助となれば幸いです。この紙面をかりまして、ご協力いただきました方々にお礼を申し上げます。

(アンケート方法はメールにて配信/アンケート回答者は33人)

JIAの未来に向けての課題

JIAの認知度と会費値下げの影響

ご存じのようにJIAは会費の値下げによって会員数の増強、特に若い会員を増やすことを狙いました。しかしながら、JIAの存在と専業設計者の団体であることはかなり高い認知度を得ているのに対し、会費を値下げしたことはあまり知られていないようです。また半数以上が36,000円の会費でもまだまだ「高い」と感じているようです。「値下げ」を知っていて「高い」と感じない人はすでに入会してしまったとも読み取れますが、「JIAの会費値下げの意向が対象者に十分伝わっていない」、「入会するメリットを感じてない」と考えるのが妥当かもしれません。前号のアンケート調査の新会員との意識の差が大きく現れた興味深い結果だと思えます。

(次ページに続く)

アンケート項目	人数
問 1 年齢	
20代	1
30代	10
40代	12
50代	7
60代以上	3
問 2 JIA認知度	
知らない	1
知っている	32
問 3 設計専業団体の認知度	
知らない	3
知っている	30
問 4 他の建築関係団体への所属(複数回答)	
所属していない	14
その他	3
建築学会	5
建築士事務所協会	4
建築士会	8
問 5 JIAに所属しない理由(複数回答)	
推薦者がいない	3
入会資格を満たしていない	6
会費が高い	7
魅力的な活動がされていない	5
設立主旨に賛同できない	0
団体に興味がない	8
その他	0
問 6 入会の可能性	
これからも入会しないと思う	20
入会を検討したい	12

問 7 入会検討の理由(複数回答)	
会費が安くなったから	1
契約書などを利用したい	3
保険などのサービスを利用したい	7
コンクールに応募したい	2
建築家とのコミュニケーションや情報収集	10
自己研鑽のため	6
建築家を一般にPRしたい	4
その他	0
問 8 入会したくない人の入会しない理由(自由記載)	
問 9 会費意識	
分からない	11
妥当	3
安い	1
高い	18
問10 値下げ認知度	
知らない	26
知っている	5
問11 登録建築家認知度	
知らない	22
知っている	10
問12 登録建築家意識	
興味がない	15
申請したくない	4
申請したい	5
理由	0

滞在的な入会志望とその動機

30代・40代の若い設計者については実に半数近くの人が「入会を検討したい」とあり、今回のアンケートをきっかけに「入会したいから申込書を送って!」という方もあり、滞在的な入会志望者はかなり多い様子です。入会の動機としては建築家相互のコミュニケーションも含めた「情報交換」への期待が最も多いようです。会費が「高い」と感じないだけの収入がある、あるいは「金額に見合うメリット」がある会であれば、あとは「きっかけ」次第といったところでしょうか。

登録建築家

残念ながら登録建築家の認知度はきわめて低く、当然ながら入会の動機にも繋がっていないことが如実に現れた結果と言わざるを得ません。今回初めて知ったが「興味がない」といった意見も多く、深く考えさせられるところです。これからの制度運用のありかたや広報のありかたが問われます。

メリットを求められている!?

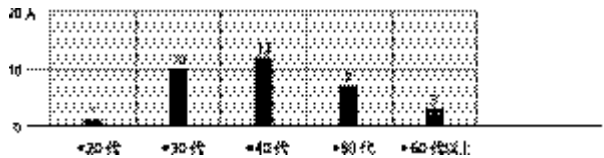
JIA よりも対象者が多く会費も安いこともあってか、他団体に加入している人が6割ほどいます。一方で、他団体も加入者の減少に苦しんでいると聞きますし、どこにも所属していない人も4割とかなりの数にのぼります。これは会費の金額によらず「団体に加入するメリットが感じられない」ということではないかと読み取れます。JIA の先達からは「メリットは自分で作るもんだ」と怒られそうですが、会員増強を図るのであれば会費値下げだけではなく「入会するメリットがある団体」と認知してもらおう努力こそが必要だといえるのではないのでしょうか。

支部広報委員長：中村高淑

問1 年齢

アンケートにご協力いただいた33名の年齢は、20代と60代以上を合わせて4名と少ないですが、30代10名、40代12名、50代の方が7名となっています。30代・40代の若い方の意見がアンケート結果に反映されていると思っています。

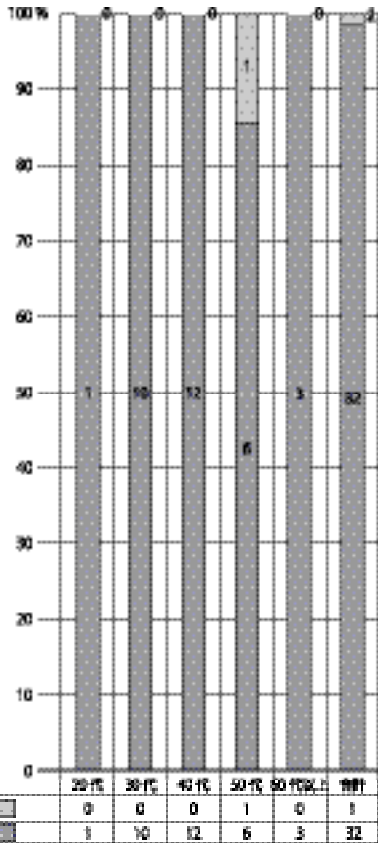
櫻田修三



問2 JIAの認知度

JIA は、年齢にあまり関係なく非常に高く認知されていることが分かりました。認知されているにもかかわらず、入会にはなかなか至らないことが、読み取れそうです。

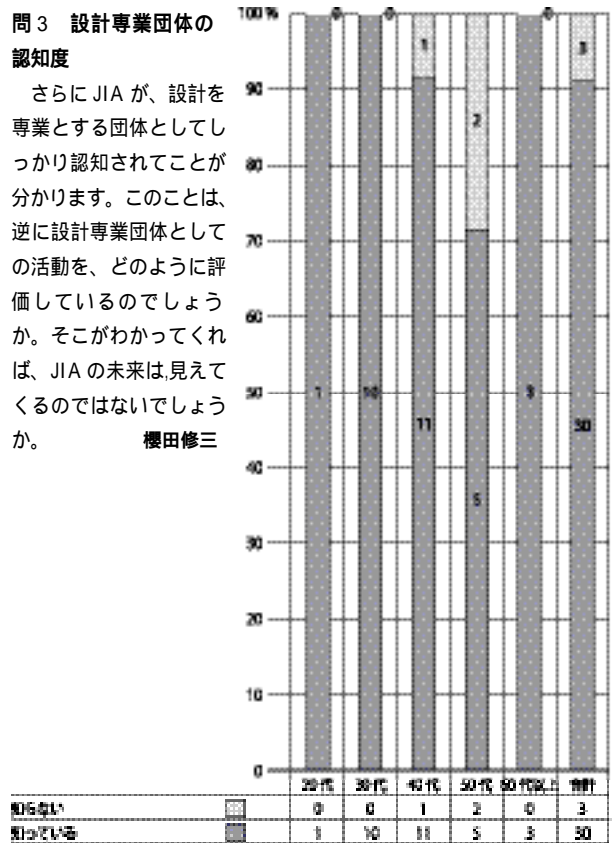
櫻田修三



問3 設計専門団体の認知度

さらにJIA が、設計を専門とする団体としてしっかり認知されていることが分かります。このことは、逆に設計専門団体としての活動を、どのように評価しているのでしょうか。そこがわかってくれば、JIA の未来は、見えてくるのではないのでしょうか。

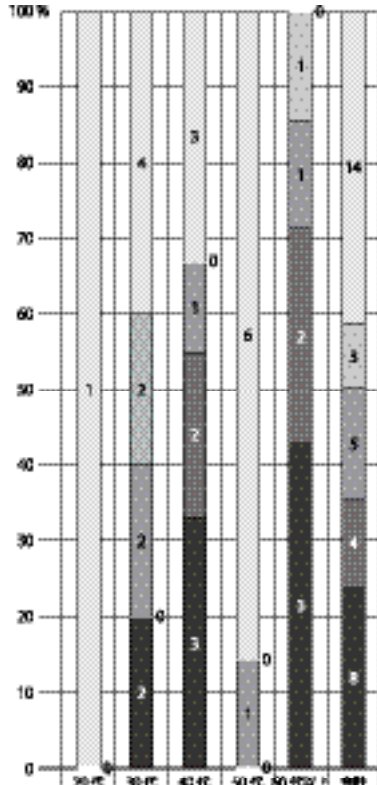
櫻田修三



問4 他の建築団体への所属（複数回答）

20名（60%）の方が、他の建築団体に加入しています。この入会比率は、前号のアンケートで行った新会員の入会比率とほぼ同じ比率となっています。加入団体で一番多いのが建築士会となっています。また、どこにも所属していない方が42%に達し、さらに年代別で見ますと、社会的にも活躍している50代の方がもっとも多いという結果に驚きました。50代の方が、もっと建築界を引っ張っていった方がいいと思うのですが……。

櫻田修三

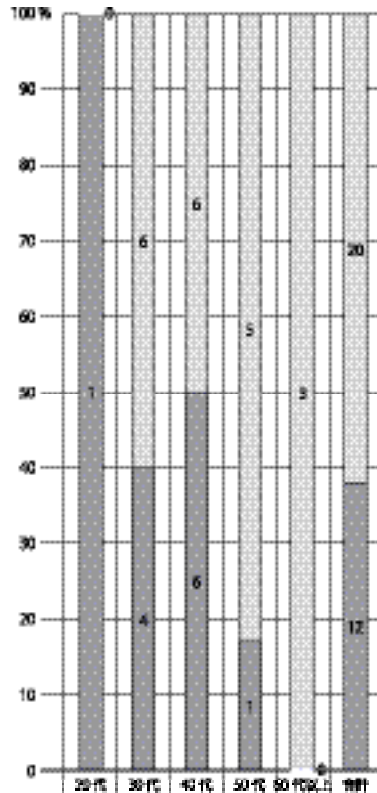


	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
所属していない	1	4	3	6	0	14
その他	0	2	0	0	1	3
建築学会	0	2	1	1	1	5
建築士会	0	0	2	0	2	4
建築士会	0	2	3	0	3	8

問6 入会の可能性

50代・60代のほとんどの方は入会しないとお答えしていますが、30代・40代の若い方の半数は、入会を検討したいと考えています。また、30代・40代の「入会をしないと思う」理由の中で、会費は高く思っていないが「魅力的な活動がされていない」から入会しないとお答えの方は25%に達しています。魅力的な企画でも、参加しにくい日時の設定はなかったかどうか検討してみる価値はあると思います。

櫻田修三

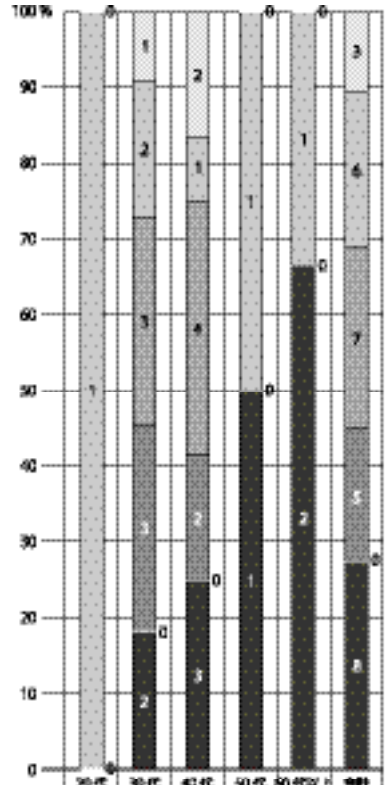


	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
どちらからも入会しないと思う	0	6	6	5	3	20
入会を検討したい	1	4	6	1	0	12

問5 JIAに所属されない理由（複数回答）

JIAに入会されない理由は、設立趣旨には異論はないが、「団体に興味がない」という理由が、各年代に共通しています。また、30代・40代の若い方は、「会費が高い」割には「魅力的な活動がされていない」と指摘しています。さまざまな活動の地道な広報が、今一番必要なのかもしれない。

櫻田修三

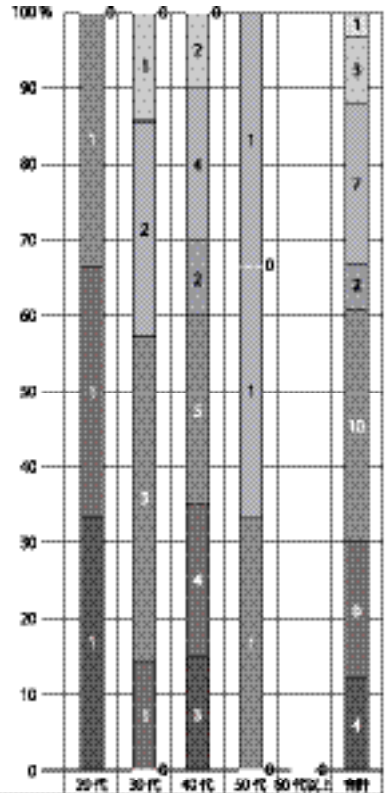


	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
団体に興味がない	0	1	2	0	0	3
会費が高い	1	2	1	1	1	6
魅力的な活動がされていない	0	3	4	0	0	7
設立趣旨に賛同できない	0	3	2	0	0	5
団体の異論がない	0	0	0	0	0	0
団体の異論がない	0	2	3	1	2	8

問7 入会を検討したいとお答えいただいた方に質問です。その理由は？（複数回答）

年代に関係なく多い理由は建築家とのコミュニケーションや情報収集。次に多いのは保険などのサービスとあり、こちらは世相の反映とも考えられます。40代の理由が多岐にわたるのは、現在、そして今後に向けて頑張ろうという意識の表れかとも読み取れます。

鈴木利美



	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
会費が高くなったから	0	0	0	1	0	1
保険などを活用したい	0	1	2	0	0	3
保険などのサービスを利用したい	0	2	4	1	0	7
コミュニティに参加したい	0	0	2	0	0	2
建築家とのコミュニケーションや情報収集	1	3	5	1	0	10
自己研鑽の在り	1	1	4	0	0	6
建築家と一緒にいたい	1	0	3	0	0	4

問8 問6で「これからも入会しないと思う」とお答え頂いた方に質問です。JIAがどのような主旨であったら、あるいはどのような活動があれば良いと思われますか？

JIAに対する職能団体としての期待と同時に、会員相互のコミュニケーション、研鑽同時に事業性というお言葉もありました。より実務レベルでのメリットも求められているものと思われます。 鈴木利美

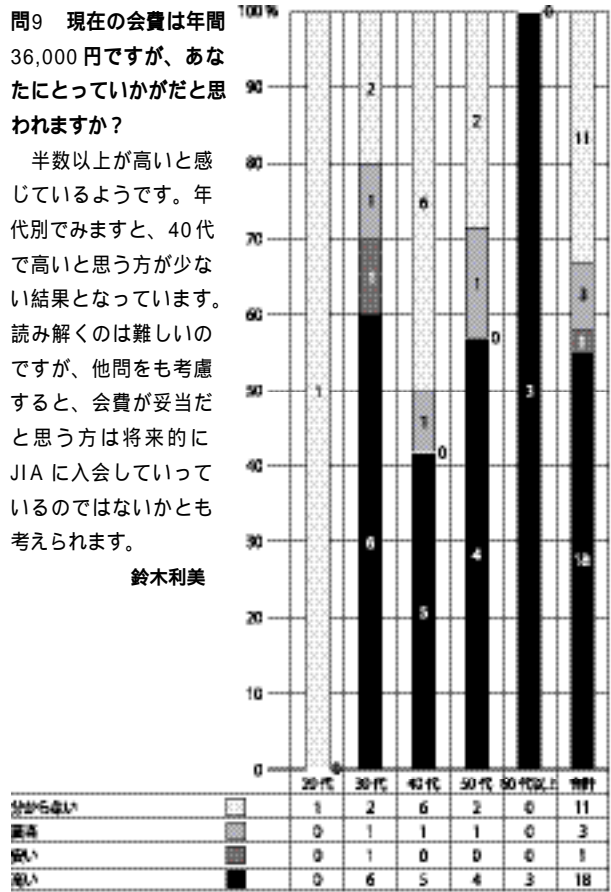
「このような団体、活動があれば入会したい」に対する皆様のご意見

事業性のある活動
建設業と一線を画した、透明性のある職能集団であることの証明活動
小事務所を経営している設計者に対してのアドバイスやサービス、経営相談や横の繋がりがあれば、参加も考えます。また、インターネット広告や広報でお金が掛かっているの、今以上に安価な会費にして欲しいと思います。
技術的な向上をお互いに研鑽できて(建築士会のように?) 権威主義的でなく、気さくになんでも話せる雰囲気があって、会費が安い。女性建築技術者の会(通称じょぎかい)の場合、会員はすべて全く平等で、会費を払ってでもそこで自分が何かやりたい人しかいないので、潔くてよい。
敷居が高そうなイメージがあります。建築家としての教育がなされていない日本での存在に異議がある。「建築家」が必要なのか? すべての団体が、統合できたらいいと思います。
一般論ですが、時代とともに組織の役割や期待が変化していくと思われる。この点からの見直しが必要とされる場合もあるのではないのでしょうか?
時間的余裕があればですが、建築に関係する者としての活動はしたいとの考えはある。

問9 現在の会費は年間36,000円ですが、あなたにとっていかがだと思いますか？

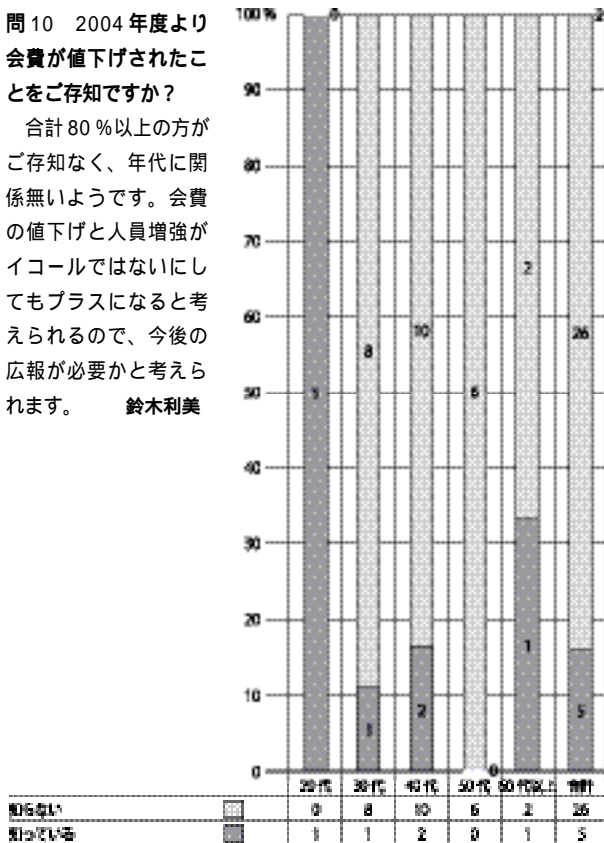
半数以上が高いと感じているようです。年代別でみますと、40代で高いと思う方が少ない結果となっています。読み解くのは難しいのですが、他問をも考慮すると、会費が妥当だと思う方は将来的にJIAに入会していいのではないかと考えられます。

鈴木利美



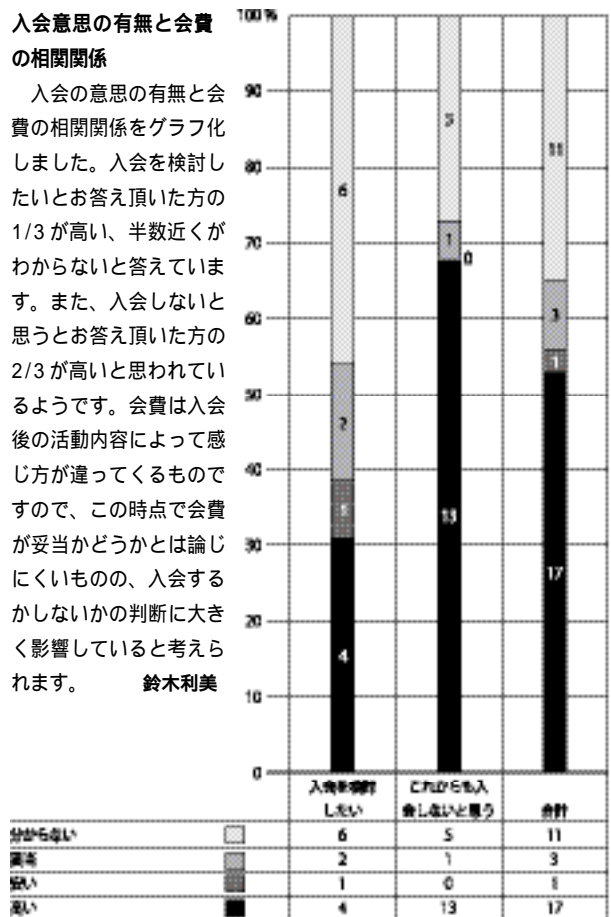
問10 2004年度より会費が値下げされたことをご存知ですか？

合計80%以上の方がご存知なく、年代に関係無いようです。会費の値下げと人員増強がイコールではないにしてもプラスになると考えられるので、今後の広報が必要かと考えられます。 鈴木利美



入会意思の有無と会費の相関関係

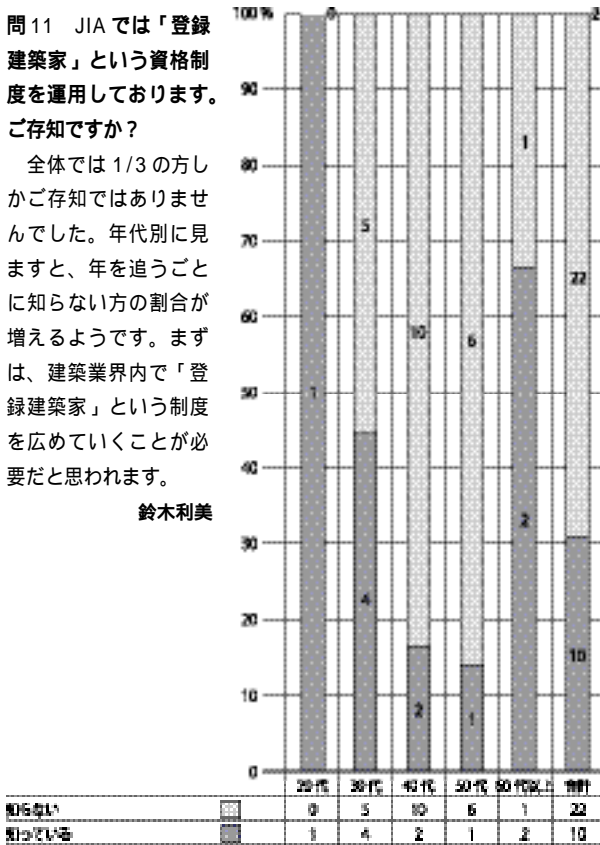
入会の意思の有無と会費の相関関係をグラフ化しました。入会を検討したいとお答え頂いた方の1/3が高い、半数近くがわからないと答えています。また、入会しないと思うとお答え頂いた方の2/3が高いと思われるようです。会費は入会後の活動内容によって感じ方が変わってくるものですので、この時点で会費が妥当かどうかとは論じにくいものの、入会するかしないかの判断に大きく影響していると考えられます。 鈴木利美



問11 JIAでは「登録建築家」という資格制度を運用しております。ご存知ですか？

全体では1/3の方しかご存知ではありませんでした。年代別に見ますと、年を追うごとに知らない方の割合が増えるようです。まずは、建築業界内で「登録建築家」という制度を広めていくことが必要だと思われます。

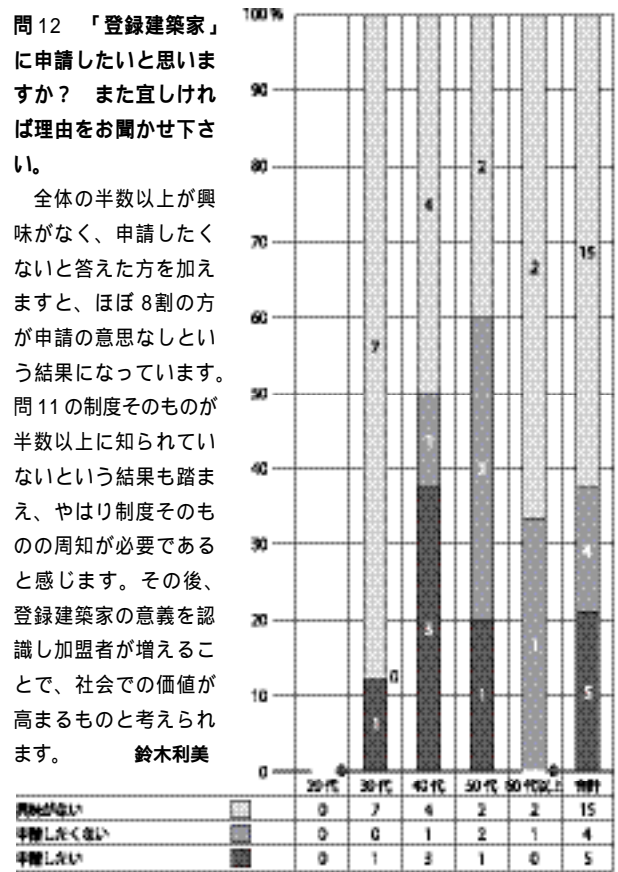
鈴木利美



問12 「登録建築家」に申請したいと思いませんか？ また宜ければ理由をお聞かせ下さい。

全体の半数以上が興味がなく、申請したくないと答えた方を加えますと、ほぼ8割の方が申請の意思なしという結果になっています。問11の制度そのものが半数以上に知られていないという結果も踏まえ、やはり制度そのものの周知が必要であると感じます。その後、登録建築家の意義を認識し加盟者が増えることで、社会での価値が高まるものと考えられます。

鈴木利美



アンケート回答者によるJIAへの意見

存在理由がよくわかりません。他にも建築士・建築家の団体は多数ありますが、それぞれの住み分けや独自性が大切になると思います。建築家への社会的要請やその職域も拡大していく時期だと思いますので、運営を大きく見直す必要があるのではないのでしょうか？ 世代差や地域差、専門性の差などがあり、一体的な活動は難しそうですが 今後の取り組み、陰ながら期待申し上げております。

学会、士会、事務所協会、土建など関係団体が多すぎる。

有意義な団体との印象を持っているが、大組織で委員会などの仕事が大変そう。本業が安定していないとできなさそう。

「建築家」と名乗ることが何の意味があるのか？

高校、専門学校、大学を通して建築家の存在意義が根付かない日本では、意味ある団体なのか非常に疑問です。建築教育を見直しても意義を持たせるまで時間がかかるかと思えます。

「棟梁」が居ての「建築すること」が長いこと続いた日本では、欧州の制度をそのまま利用するような意識のある「建築家」には何とも賛同しがたいような気がします（議論はいろいろありました）。建築に携わらない一般の人にはどのような存在意義があるのか！？

*会の細部に関して知らないところがあるので、失礼なこともあるかと思いますがお許しください。

設計専従者のみによる職能団体という前提条件の下では、これ

からも入会することはない。ワーキング、セミナーなど魅力的な活動を企画し、設計専従者以外にも準会員のような立場を設けて、参加を促すことで本来の活動を活発にする効果はあるかも知れない。現時点では、文書情報管理や、設計技術伝承の現実などに興味がある。

建築家という一種の特権の臭いがし、違和感を感じる。

「日本建築家協会」という名前は聞いたことがありますが、どのような活動をされているか分かりません。また入会資格などが厳しそうなイメージがあり、今まで興味を持って調べたこともありませんでした。今後の協会アピールに期待します。

構造計算偽装問題にしても対応が遅い。

建築士会のやっている建築士賠償責任制度のような制度はないのでしょうか？ 士会に入会して、建築士賠償責任制度に入ろうと思っています。

貴団体についてよくわからない。今後いろいろ確認してみたいと思いました。会報誌は特に望みませんが、無記名では回答したくないので。

金銭的諸々の理由で入会はしておりませんが、建築家の職能を代表する団体としての活動に期待しております。頑張ってください。

入会の案内などありましたら送っていただけますか？

よろしくお願いします。

地域の木材資源を 地域の技術で地域の経済に役立てよう

活動13年



小田原 健氏

風倒木災害・で気づく

私がこの十数年「地球基準」で話し合おう、と言い始めたのは、巨大な森林災害の現場を目にしたことからでした。平成3年台風19号が大分県日田地方を襲い、300万立方メートルの杉の木をなぎ倒しました。さらに豪雨で倒木が、川なき山から流木となり、巨大な発電所のダムに流れ込み、一面を埋め尽くしました。「上津江村」「中津江村」は想像を絶する惨状となり、村中パニックでした。なぜこのような大災害となったのか。「私の目にしたことは自然災害でなく、人災だったのではないか」と思いました。住宅用の資材として国産木材は買ってもらえず、林業者の森林の手入れが経済的に出来ないのです。間伐、枝切をせず、根元が弱り切っていた森林に、台風と大雨により簡単に倒れてしまったのです。

政府は巨額の災害見舞金を各林業社に出すことを決めました。村の人々たちはおかしな収入に湧き、売れない森林木材が風倒木となり、現金になったからです。しかし、村の一部の人たちは育てた杉が流木でも利用できないだろうか、と考えていたのです。政府の見舞金の内容は「使用不能」との判断によることでした。私は木材資源の恩恵により、豊かな生活に感謝している一人なのです。住宅に使用すれば約10万棟も建つほどの量があったものの、森林組合も林野庁もすべて焼却処分に決定。5億円の費用をかけ、約2年間燃やし続けるのです。なんと理解できない決定なのでしょう。さらに流木は私有林から流れ出た落とし物木材であり、丘に上げられた傷だらけの丸太は警察が2年間、落とし主が現れるまで管理する法律があるのです。山積みされた丸太は一切手をつけてはならぬ、とのお達しでした。丸太は植物です。2年間製材せず、雨ざらしにすれば、虫が食い、腐食がおこり、木材として利用できません。それこそ焼却するのみです。

風倒木を東京の人々に見せよう

私は関係者に「ちょっと待ってよ」と、「有効利用を考えますから」と約束しました。プロジェクトチームを

組織し、具体的企画案を立てました。それはログハウスを東京で発表するという企画でした。林野庁や関連団体などに資金協力の要請願いに行きましたが、すべて門前払いとなってしまい、大変困りましたが、メンバーの底力と結束力により、東京の青山で発表会を行うことになったのです。この発表は単なる商業ベースの展示会ではなく、社会問題の一つとして新聞、テレビ、各種マスメディアと発表の一週間前に記者会見を行いました。

NHKを含み各社は重大性を感じ、新聞、テレビで毎日全国に放送され、話題の展示会となりました。来場者はなんと農林大臣でした。「協力せず申し訳ないことをしました」との詫びの言葉を下さいました。今後の風倒木利用の政府援助の約束をその場でしてくれました。その後、上津江村も、木材加工所「トライウッド」を設立することが出来、中津江村の「工房蜂の巣ログハウス」も現在村一番の産業となっています。展示会場はなんと、6日間で8000人の来場者があり、日田杉の質の良さを肌で触れ、感動していただけたのです。ログハウスも1000人の方々が建物を買いたいと、署名をいただきました。杉で作った家具なども、その後多量の受注をいただき、納入させていただきました。日田杉で作った下駄4000足も販売し、地元日田の下駄屋さんも驚いていました。私も下駄を愛用しています。日本全国の森林が同じように危険な状態になっているのでは、と感じました。このプロジェクトこそ、今後重要な事業にするべきと気



中津江村の風倒木

づいたのです。これほどの注目を浴びた発表でしたが、その後どこの森林組合などからも反応はなく、声を聞くこともありませんでした。

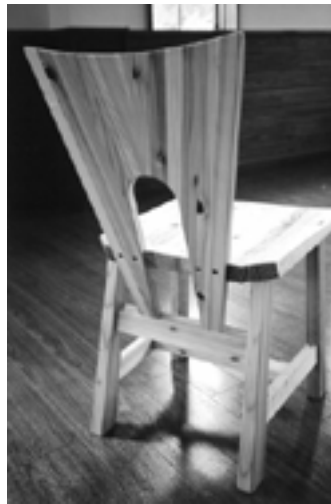
上越・協同組合ウッドワークとの出会い 日本の間伐木材の有効利用の始まり

雪深い上越の小さな建具協同組合の18工房との交流を始めました。上越とご縁があり、月に2回ほど訪問している間に、根曲がり杉を利用して木工品を作りたいので、技術指導をしてほしいとの

要請を受けました。私は針葉樹の加工技術は建具職人が一番だと確信していました。日本中の職人が質の高い伝統的基礎技術を身につけているのです。建具のみならず、何でも作れます。建具の技術で家具を作ろうと、特に椅子作りの指導をすることにしました。一般家具職人は広葉樹で家具を作ります。少し道具が違うのです。建具職人は針葉樹のホゾの入れ方、鉋の削り方に別格の技を身につけているのです。各工房の視察訪問をさせていただき、組合の理事長に「この職人さんたちなら日本一に育てますよ」と約束しました。その結果、1年半で間伐材有効利用技術展で、農林大臣賞と最優秀デザイン賞を受賞したのです。名も知れない小さな村や町の小さな木工建具組合が話題となり、各種マスコミが殺到し、新潟県の話の組合として急成長したのです。今では安定した売り上げもあり、心の狭かった下請けから脱出し、職人として胸を張って、作品づくりに精を出しています。売り上げの70%が大都市のお客様となり、顔の見える交流となっています。売ることを知らなかった職人でも、時代のニーズにあった努力をすれば大きな未来が見えてくるのです。この成長で、最も重要なことは植林した根曲がり杉材の特徴を活かし、売れる商品づくりにより、林業社から木材として正しい価格で買うことができたのです。林業社は森林の手入れも進み、健康な森林育成に励み、生態系の保護へと発展しているのです。環境を守る職人集団となり、「NPO 木と遊ぶ研究所」を設立し、市民運動へと発展しています。

実績が物を言い、各地に広がる

環境意識の高い長野県の田中康夫知事の要請を受け、県産唐松の有効利用事業を進めました。知事を座長に、



協同組合ウッドワーク製作の杉の椅子

文化人を委員に「森世紀プロジェクト」の設立をしたのです。健康な森林により、水や空気をおいしくしようと、上越のウッドワークの経験を活かし、準備を進めました。県内各地の木工所を訪問し、膝を交えてプロジェクト参加の要請をしました。47人の侍職人の集団が結束したのです。「協同組合森世紀工房」の名で、私が代表（親方）に任命され、具体的指導に当たることになりました。デザインの提供により、試作の勉強に取り組み、見事な作品を生み出し、全国木工技術展

にも多数の入賞作品を発表したのです。

実は信州唐松といえば、木材の専門家は「塵の山」というのです。私は「宝の山」と言っています。あまりにも大きな意識の違いではありませんか。唐松はねじれる、節が多い、脂（ヤニ）が多い、欠点ばかり言ってくるのです。私は「節は宝石のように美しく、脂は最高級の塗料となり、屋外でも腐れにくく、ねじれは技術とデザインで解決です」と言いました。消費者も、木材専門家も、唐松とはこんなに上等な木材だったのかと口を揃えて言っていました。話題の長野県庁のガラス張りの知事室にも唐松の家具を納入できたのです。県民の皆さんが大切に使用いただいているのでショールームのようです。着実に唐松木材の有効利用商品の普及が進んでいます。県内の各施設にも使われるようになりました。

最後にひとこと

日本の住宅産業のあり方に疑問を感じています。木材資源の無駄遣いです。35年ローンの住宅が25年でガタが出てきます。住宅は国民の財産です。商業施設とは違い、償却建築とも違うのです。建てては捨てる、世界一の木材消費国となってしまったのです。さらに日本の木材商社が、今だに世界の各地で森林の違法伐採により原住民に危害を与え、世界の環境破壊を行っているのです。すべての消費者が、産地証明のない木材は買わないことです。他国での環境破壊は戦争より重罪です。森林を大切にすることで、世界の環境保護のサポートができるのです。

「シロアリ族」と言われないように、「地球基準」で行動する日本の建築家として役立つことが今日求められていると思います。

(株)ベル研究所

はまっ子どろし JAZZ IN

道志村水源林間伐材ハマッ子ブランド化事業 / 交流イベント



小澤 勝美

去る3月18日(土)に道志村で「NPO 横浜ひと・まち・くらし研究会」主催、JIA 神奈川ほか後援でジャズのイベントを開催した。横浜の水源の森になっている道志村をもっと横浜市民に知ってもらい、道志村の人たちとの交流を図ろうと企画された。横浜と道志村の小学生とその父兄他、約130名が参加し、中川喜弘とデキシーディックス7名の皆さんの演奏を堪能した。

まず、鶴見区にある東京ガスの環境エネルギー館を見学し、事前勉強を行い、一路道志村へ向かう。演奏は廃校になった小学校の体育館で行われ、道志村の木材を利用し作られたグッズや土産の即売、NPOで考案されたプライバシーを確保するための災害時避難支援グッズなどが展示された。(写真参照)

中川さんらはニューオーリンズ発祥のデキシーランドジャズのジャズミュージシャンである。軽快でユーモラスなおしゃべりが印象的で、子供たちにも分かりやすく、大人にもなるほど勉強させてもらった。

まず、ジャズのテンポとリズムの取り方を演奏者の紹介と共に行う。映画で話題になった「スイングガールズ」でも紹介されたクラシックとは正反対のリズムの取り方だ。

第1部はセントルイス・ブルース・ブギ、大きな古時計、星の世界、バーボン・ストリート・ブルース、シン

グ・シング・シング。皆聞き覚えのある曲をジャズのリズムとトランペットやトロンボーン、サクスのパンチのある音がスイングの世界へ招く。体育館の広さと吸音材の少ない内装材の影響で、丁度よい残響音で迫力ある音になる。

休憩時には道志村グッズ販売に多くの人が集まった。ペンダントや置物といった小物類が主体だが、木の温もりを感じるものばかりだ。一方では、子供たちとプロの演奏家の共演が企画されているので、その準備を中川さんと子供たち5名が短い時間の中で練習に余念がない。皆の真剣な瞳が印象的だ。

さて、いよいよ2部。星条旗は永遠なれ、コンドルは飛んでいく、ラサス・トロンボーン、トルコ行進曲、ピタースイート・サンバ。茶色の小瓶は全員で合唱する。ここから5人の子供たちのトランペット、トロンボーン、フルート、ピッコロ、キーボードが参加する。皆初めての事だったが、ジャズでの共演は良いハーモニーを創る。ピリブは歌詞が用意され、大人も一緒に合唱する。この2曲は卒業式でも唱われる人気曲である。最後の聖者の行進は中川さんを先頭に、まさに子供たちの行進だ。父兄や先生方のフラッシュが眩しい。その顔や表情を観察すると、ジャズの想いや力を感じる。演奏者、子供たち、大人たち、皆スイングしてる。

ジャズと道志村と、はまっ子たちのひとときは子供たちの小さい胸に大きな思い出として強くスイングしたに違いない。
(株)ユー・アール・ユー総合研究所



東京ガス環境エネルギー館にて



災害時避難支援グッズ



子供たちとの共演

開閉式連続格子戸



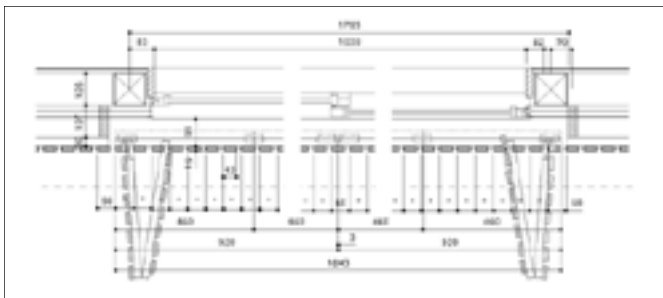
鈴木 信弘

こだわりのディテール

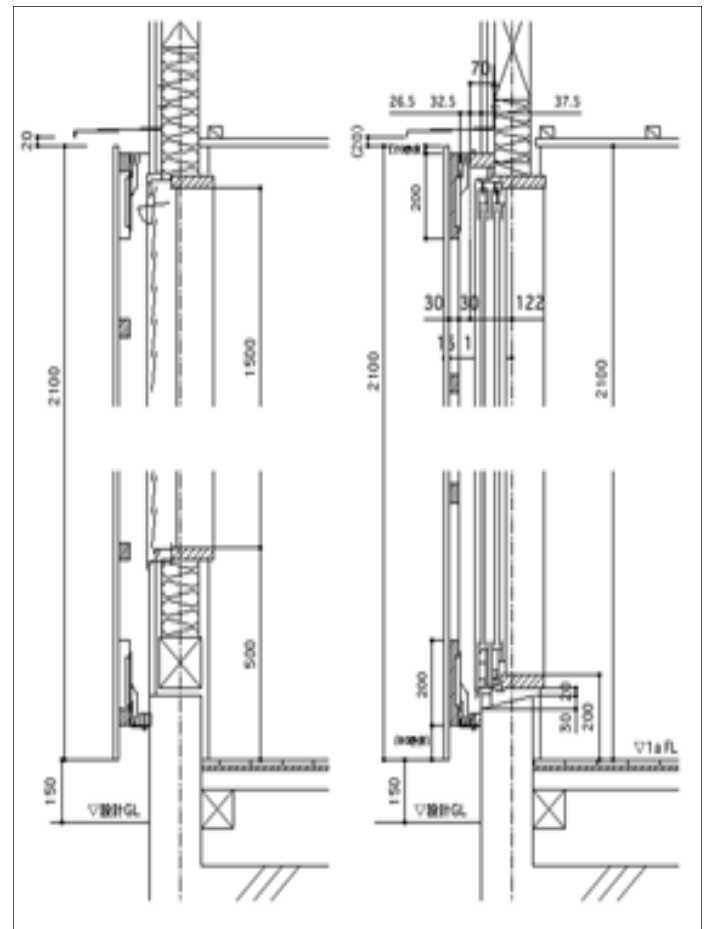
この格子はプライバシー保護と通りに対しての「凜」として表情を持たせようという意図で設計したものです。一見固定の格子のように見えますが、実際はルーバー/引き違いサッシュ/開き戸の3つの開口部が裏にあり、必要に応じて開閉する仕掛けです。徹底してすっきり見せること、防犯面からも泥棒ごとに見破られないように外部からは取手はありません。色々と考えた結果、Hawa マルチフォールド 30 という家具用金物を利用しました。この金物を選んだのはバックセットと被り、クリアランスの関係が、厚15mm 幅90mm の縁甲板を半割にして43mm とし、60mm ピッチで繰り返すことでぴったり整合し完全な等ピッチで実現できるからです。玄関脇のポストや表札、6尺幅の規格サッシュもこのピッ

ちに徹底して納めて隠すことができました。ひとつの部品から全体が決まり、それが流通している寸法規格にすべて揃い、材料の無駄も出ないという良い事づくしの設計だと一人で興奮して現場に持ち込んだのですが、予想外の出来事もありました。格子羽目板の工事費+建具代で18万円の予算だったのですが、工事する段階になって、建具屋さんから「この金物、部品だけで18万円もしまっせ！ どうします？」と慌てた電話がかかって来ました。折角の提案も工事費が倍になってしまうのでは諦めか？とガックリ。幸いにクライアントのお陰で実現しましたが世の中「美しいものにはお金がかかる」のでしょうか？ デイテールにこだわるって罪ですね。

(有)鈴木アトリエ一級建築士事務所



平面図



断面図

2005年度の保存要望活動について



保存問題副委員長
金山 真人

保存問題委員会では活動の一環として、解体の危機にある建築の所有者や関係自治体などに対して、当該建築を保存・活用を要望するために、いわゆる「保存要望書」の提出を行っています。要望書の提出に至るまでには多様な視点からの意見交換が重ねられますので、時として委員会の活動の大部分を占めてしまうこともあるのですが、振り返ってみますと、昨年度はその要望書を10通も提出しました。要望書は提出後すぐにJIAのホームページに掲載するとともに、早い時期に「Bulletin」誌上で提出の背景や趣旨などについて説明するように努めてきたのですが、「カトリック新発田教会」「旧国立公衆衛生院」以降、あまりの多さにままならず、ようやくここに纏めてご報告させていただく次第となったことをまずはお詫びいたします。

さて、その10通の要望書は別掲の通りです。提出の対象となった建築は正に多種多様ですが、大きな特徴として、地域会との連携の重要性がますます高まってきたこと、1970年代以降の近・現代建築までもが「歴史的建造物」としての保存要望の対象になってきたこと、そして都市計画的な枠組みの中で歴史的建造物の位置づけを模索していることなどが挙げられるように思います。新潟の「新発田カトリック教会」に関する地域会の粘り強い取り組みについて以前に報告がありましたが（Bulletin 190号・武蔵委員）、地域会との連携は保存問題委員会の大きな柱であり、栃木地域会と連名で提出した「栃木県議会棟」の要望書は、現地での見学会、2004年度の「保存問題千葉大会」での大高建築の現状の認識共有、委員会での現代建築の脆弱性に関する議論などを経て、1年以上の時間をかけて提出されました。また、神奈川地域会との連携は、大磯の「旧山口邸」などの地域のランドマークとなる建築や、地域住民の声に応える

形で提出へと進んだ「スタンダード石油社宅」、そして大規模な再開発が想定されるエリアに多数存在する歴史遺産に対する包括的な注意喚起を試みた「旧帝蚕倉庫群」への保存要望など、多様な問題意識の中で行われました。

また、昨年度は新たな試みとして、郵政民営化の流れの中で存続が危惧される「東京・大阪の両中央郵便局」に関して、近畿支部の保存再生委員会と連携し、両支部の連名で保存要望を行いました。東京都内では、「丸の内八重洲ビル」、「旧国立公衆衛生院」（Bulletin 191号・小西委員）、「歌舞伎座」、「中銀カプセルタワー」と都市再生の流れとの係わりも感じられる中での要望書の提出が重なりました。八重洲ビルは三菱一号館の復元を含む再開発事業の中での、歌舞伎座は岡田作品の弟子である吉田五十八による（今で言うところの）リノベーション建築に対しての、中銀は国際的な反響の中での会長名での、多くの複雑な問題を抱えるなかでの要望書提出となりました。また、公益的な性格をもった団体の「経営」への姿勢転換や、企業において不要不急とみなされた財産の処分動きなど、郊外エリアにおいても種々の問題が顕在化しているのが昨今の情勢であり、東京の地域会のあり方の変容も視野に入れつつ、委員会としての取り組みを模索しているところです。

建築家として建築の価値を広く社会に伝えていくことの一環として、ある特殊な局面としての保存要望書の提出という活動が存在しています。本来、個々の建築には固有の価値と歴史があり、要望書に関しても個々に伝えるべきことが多くあるのですが、先に述べた事情により纏めての報告となりました。これらの要望書はJIAのホームページにて閲覧可能です。是非ご一読ください。

(有)金山真人建築事務所

- 06/02「新発田カトリック教会」の前庭を含めた環境保存に関する要望書（新発田市長宛）
- 06/03「旧国立衛生院白金庁舎」の保存活用についての要望書（厚生労働大臣宛）
- 09/09「本牧スタンダード石油社宅（ソコニーハウス）」および敷地の保全活用に関する要望書（横浜市長および所有者宛）
- 09/30「歌舞伎座」の保存活用に関する要望書（松竹株式会社および株式会社歌舞伎座宛）
- 10/11「丸の内八重洲ビル」の保存活用に関する要望書（三菱地所株式会社宛）
- 10/14「旧山口勝蔵別荘」の保存活用に関する要望書（大磯町長宛）
- 11/30「栃木県庁舎議会議事堂」の保存活用に関する要望書（栃木県知事宛）
- 12/03「東京中央郵便局庁舎」および「大阪中央郵便局庁舎」の保存活用に関する要望書（総務大臣および日本郵政公社総裁宛、近畿支部と連名）
- 12/16「中銀カプセルタワー」保存再生に関する要望書（中銀カプセルタワー管理組合および中銀マンション(株)宛、会長と連名）
- 12/27「旧帝蚕倉庫事務所と周辺の歴史的建造物群」の保存活用に関する要望書（北仲通北区再開発協議会宛）

建築相談員として 考えさせられること



JIA埼玉建築相談室相談員
田中 照雄

昨年の暮れに現場調査依頼を受けた件について、書いてみたいと思います。

「施工業者からの完成引渡し後、引越しも終わり外周を眺めて見ると外壁が何だか四辺ともそれぞれ内側に倒れているように見える。息子にも見てもらい確認したところ、確かに倒れていることが判った」という住宅の建築主からの調査依頼を受け、外部から内部へと垂直・水平の調査が始まった。

施工業者を立ち合わせ、建築主と私との三者で時間を合わせながら六ヶ月の月日が過ぎた。その結果、測定した部分の柱・壁の七〇%が三ミリから七ミリまで傾斜していることが判明した。特に和室一間続きの柱の傾きについては、施工業者も指摘出来なかった。原因はプレカット時の切り寸法の誤差にあり、その誤差が構造体全体に傾斜を作ってしまったということであった。

外壁の傾き・柱の傾きの修正を施工業者に依頼したが、品確法七〇条の条文をたてに言うことを聞かないのである。和室の天井高は二・四メートルで、傾きは七ミリなので、この数値では一〇〇〇分の二・九だか

らレベルーにも該当せず、瑕疵はないと主張している。県では、大手住宅会社の姿勢に施工主も憤慨し、建て替えを要求したのである。柱一本とか壁一部分とかいうのではなく、半分以上の部分（サッシ、シャッターなど）がすべて柱付部材は内側に傾斜または変形しているのである。住宅会社にも足を運び交渉したが、七〇条をたてに建替えはおろか和室の柱の修正にも応じないのである。

県の紛争処理支援センターにもお願いしたが、七〇条が歯止めとなり何ら進展もなく、施工主は頭を抱え込んでしまった。襖が変形し、サッシ・シャッターも傾き、玄関ドアも自然に閉まってしまつ様な新築住宅を引き渡す住宅会社に変形したモデルを感じさせられた。

七〇条とは何なのか？ 施工業者の甘えを守るためにあるのか？ 人間の生活する場合は、見た目にも快く感じることも重要なことであるはずだ。寸法の割合だけを紛争の歯止めとするのは、建築主の立場に立って考えた時、決して割り切れるものではないと私は考える。

定期報告制度について

「法一一条による定期報告は、調査報告をしなくても何のお咎めもないのでしょうか？」長期に渡り定期報告手続きの依頼を頂いているお客様から、こんな質問を受けました。話を聞いてみると、「同業者の方からそのような話を聞き、それなら私も経費が掛かることなので止めたいのですが……」というわけです。建築基準法第一二条一項の他に政令で決められた規模の建築物の所有者は、定期的な特定行政庁に報告することが義務付けられており、その所有者には報告用紙一式が送

られてきます。最近では記入項目も大変多くなり、細部に至るまで調査を行わなければ、記入出来ないほどになりました。従って、経費も多く掛かってしまうことになりました。お客様は「同業者の方が言うように、報告書を提出しなくても何のお咎めもないのなら、報告書を提出するほうが損をする」と言つのです。困った話だと思われました。私は「もし万一、事故が起きれば、建築物の所有者の責任になりますよ」と申し上げましたが、お客様には分かって頂けませんでした。

この通知の発信は建築指導課で、届け先は公益法人（県の建築住宅安全協会）となっております。このような組織で行政を行っているのが現状です。毎年、同じ封筒で何の意思表示もなく、報告書用紙が送られてきます。最近の話ですが、ホテル業者でホテルの竣工検査後、違反改修が行われ問題になりました。定期報告が毎年行われていても、内容をチェックしないまま報告書が受理されていたのだと思われれます。報告書の中には、違反事項についての記入項目があります。現況を見ずして報告をしたのかどうかは判りませんが、公益法人では違反について、どう処理したら良いのか判断が出来ないでいたのかも知れません。私は法一一条を違反建築の発見に大変有効な法律だと思っています。ただし、それはしつかりとした組織になればの話ですが。建物の検査には、消防関係の検査もあります。しかし、これもまた消防担当者が建築関係の違反を発見したとしても、建築関係課に連絡することは稀です。「何かのきっかけで気付き、大騒ぎをする」というのが、最近の建築の世界のような気がします。

第50回アーバントリップに参加して

神奈川県立保険福祉大学と鎌倉のN邸



南知之

左：神奈川県立保険福祉大学 / 右：鎌倉のN邸*

私がこのアーバントリップに参加したのは前회가初めてですが、すでにこの研究会が50回を数えているということが驚きでした。なぜならば2回参加しただけでも、いずれも大変充実した（相当疲れた？）一日を送ったからで、このように中身の濃いプログラムを長期間継続していることはびっくりです。

さて今回は、3月8日に開催されましたが、朝からの好天に恵まれる中、『湘南地方の建物3題 PFIによる建築、つくりを工夫した住宅』というテーマで3つの作品を見せていただきました。1999年の「PFI法」制定以降、この方式による建物が多く世に出され、また事業方法として行政の中に定着する一方で、社会資本の整備の方法という観点から、また建築設計の決定プロセスという面からも問題点が、多く指摘されているようです。しかしPFIの問題を論じるのは今回の目的ではないので、見学したPFIの2作品についてまずお話を進めます。

神奈川県立保健福祉大学は事業者・設計企業・建設企業の3者からなるコンソーシアムにより設計・施工を進めた建物です。実に建物をコンパクトにまとめ、「ひとつ屋根の下」におさめています。とにかく屋根が大きいなあというのが直感です。しかしちょうど春休み期間中で学生もほとんどいないこともあり、学生で中央のプラザ（交流広場）がいっぱいになれば、よいスケール感になるでしょう。厳しい予算の中、ローコスト化を追求した結果、通常的设计ならついでしまう贅肉を厳しくそぎ落とした努力の過程が見てとれました。ディテールはシンプルに、内外装とも白を基調とし、サイン等で色目をつけたデザインにおいて、アートワークが全体にアクセントとなり、生真面目な建築にユーモアを与えていると感じました。その中でも様々な材料によるキューブはとても興味を持って実際に触ったり、叩いたり体験をしました。意匠だけでなくサステイナブルに対する取り組みも様々行われており、このキャンパスをこれだけのしっかりとしたデザインに纏め上げた東畑事務所の林さん三谷さん岡本さん以下大林組を含めた

設計者のご苦勞に敬意を表します。

神奈川県立近代美術館葉山は、プロポーザル方式からの通常の流れで実施設計が完了され、その後PFIとなった建物であり、その意味ではコストとの格闘というPFIの宿命からは一線を画していると思います。まず最初の印象は、伸び伸びと、また自らを強く主張せずに、さりげなく建っているなというものでした。中庭のスケールも程よいもので、海外のファンも実に多いそうです。この美術館の隠れたしかし最も重要な仕掛けは、光の取り入れにあります。4つの展示室は、形・大きさも違っただけでなく、光環境が各々異なります。その内の2つは自然光を積極的に取り入れた展示室で、トップライトから2回のリバウンドにより、和紙入り合せガラスの光天井に光を落としこむという手の込んだディテールにより、展示空間に柔らかな光を導入しています。さらに私たち見学者はこのトップライトを上部から見る事ができるという恩恵に預かることができました。特に正方形の展示室は天空光を光天井全面に取り入れた室で非常に柔らかで明るい光が空間を満たしており、とても気持ちのいい空間でした。建物の説明をしてくれた設計者の佐藤総合の香月さんと館長さんや学芸員さんとの関係は、とてもよい関係が構築され維持できていることが、傍から見ても伺うことができ、よい印象を持ちました。

さて、最後に記すことになりましたが、「つくりを工夫した住宅」である鎌倉のN邸は朝一番に見学した建物です。まさに緑に囲まれ、閑静な場所に建つこの小さな住宅の前に立ってみると、縦張りの木摺にべんがら塗りと漆喰の白が見事にマッチして、なんともいえない雰囲気を感じていることでした。家の中に入ってみると、それは設計者の藤本さんが意図している「昔のものと思われがちな日本の家屋の美しさ」であることに気が付きました。とても懐かしく、またインティメイトに感じられるこの空間は私の好きな空間でした。

最後に、この企画にいつも尽力されている野生司設計の西見さんおよび東京ガスさんに感謝の意を表したいと思います。

(株)石本建築事務所プロジェクト推進室

*写真：櫻田修三

住宅部会

JIA 市民住宅講座について



住宅部会
JIA市民住宅講座担当
庫川 尚益

住 住宅部会では建築家の役割を一般の方々に、より一層理解していただけるよう、毎年各方面で様々な活動を展開している。住宅は人々にとって身近な建築物であることから、世間の関心は高い。こうしたことから住宅部会では住宅セミナーを、重要な対市民活動のひとつと考えている。単なる住宅作品の紹介ではなく、住まい方や住いづくり、さらには環境や都市問題にいたるまで様々な話題について、住宅部会員が日ごろの設計活動を通して得られた体験などを交えながら分かりやすく説明し、建築に、そして建築家に親しんでいただこうと努力を重ねている。セミナー終了後のアンケートでは、セミナーについての感想や、建築家についてどう思っているのかということも知ることができて大変有意義である。アンケートの問いのひとつに「住宅を建てるさいに建築家、工務店、ハウスメーカーのどこに依頼するか」というのがある。それに対して、建築家に仕事を依頼したいのだが、迷っているとか、そもそも建築家に依頼しない、と答えている人がどんな理由をあげているかという、「建築家の仕事がよく分からない」「何となく敷居が高い」「建築家の設計では性能や品質面で不安がある」「依頼者の言うことを聞いてくれないのではないか」といった答えが多い。

建築家に住宅の設計を依頼したいと考える人は全体からみるとごくわずかではあるが、こうした人々に対してすら、適切な情報が十分に行き渡っていないことが伺われる。

建築家は一般市民ともっと触れ合う必要がある。建築家

の役割を理解していただき、信頼を得るために私たちは相応の努力をしなければならない。住宅部会では現在新宿OZONE、銀座INAX、JIA館の3箇所一般市民向けの住宅セミナーを行っている。この中で最も新しいのがJIA館の「JIA市民住宅講座」である。セミナーでは「建築家の役割」について、毎回必ず解説することになっている。受講者は知識だけではなく、建築家の仕事や建築家その人を知ることになる。

JIA館は建築や建築家に関する情報の発信地である。市民の皆さんにもっと気軽に足を運んでもらえる場所であっても良いと考えている。2004年のJIA館での最初の講座は受講者ゼロであった。翌2005年の第2回目は、18人であった。今年は3月、6月、9月、11月の各金曜日夜に計16日間行う予定である。すでに終わった3月の第3回セミナー「家を建てる前に知っておきたい正しい知識」では、朝日、毎日各新聞に掲載されたこともあって、定員を超える延べ80名以上が受講した。情報が氾濫する中で、より正確なことを知りたいという、市民のニーズが根強くあるような気がする。

今回のセミナーでは、新たに講評会を試みた。受講者から提供された個別のケースについて、建築家と受講者が、あるいは建築家と建築家が相互に意見交換を、公開で行うものである。まだまだ試行錯誤ではあるが、受講者の反応をみながらさらに良いものに行きたいと考えている。

(有)くらかわプランニング設計



市民講座



東京地域会

東京地域会は今



東京地域会を考える
特別委員会

中山 信二

昨年6月に発足した「東京地域会を考える特別委員会」は、2004年10月から約半年の準備期間も含めて既設の中野・杉並・三多摩の地域会の暖かい支援を頂きながら、新宿・城東・文京・渋谷の4地域会の設立を実現し、世田谷を始めとする残りの地域の会員の立ち上がりの確かな手応えを受けながら一応の使命を果たして活動の幕を閉じることとなりました。約2年近い活動の中で、松原支部長の力強いリーダーシップの下に特別委員会に参加されたメンバーの方々に対し厚く御礼申し上げますと同時に、アンケートやメールを通じて多くの会員の皆様と地域会活動について意見交換できたことを深く感謝致します。

この1年で既設3地域会合計115名であった地域会員が、本年度末で7地域会約230名となったこと。他の立ち上がりつつある準備会やアンケートで参加や情報共有意思を示した会員を含めると、約400名近い会員が地域会に関心を寄せている実態が明らかになりました。このことは事務局で把握している在勤ベース（支部会報送付先）の都内の会員数1775名の22%に相当します。地域会は在住会員が中心となるべしという考え方に立つと、在住会員ベースの1184名の33%に達します。このことは、地域的なバラツキを度外視するとJIA会員10人に2～3人が地域会に所属ないしサポートする会員が存在するという事で甚だ力強いメッセージではないでしょうか。これは特別委員会の活動の成果でも何でもなく、建築家を取り巻く社会の変化が我々を地域会活動に目覚めさせた結果といえると思われれます。詳しい活動報告は、支部総会資料や支部HPに掲載されるのでそちらをご覧頂くとして、限られた紙数を考慮して感想めいたことを簡潔に述べさせていただきます。

**東京の地域会は、外周部から都心部へ、
在住から在勤へ、と浸透する傾向が見受けられます**

この1年間の推移を見ても、今までJIA活動から遠ざかっていた会員の参加が顕著に見られ（城東・文京など）、従来にない新しい形の社会に向けた情報発信活動として

確立されつつあります。また既設の三地域会が都西部の在住会員の参加が主体であったのに比べ（在住比率：三多摩96%、杉並94%、中野56%）、新しく発足した地域会は、都心・東部に及び在住の比率が下降しています（城東70%、新宿60%、文京48%、渋谷33%）。

**地域会の活動テーマは地域が抱える問題を基調にして
相互の連携の中で考えるべきです**

新しく発足した地域会は具体的な活動テーマはこれから煮詰まっていくところが多いと思いますが、設計者選定・保存・環境・街づくり・防災・景観といった一般的な切り口も地域の現状分析の中で様々なウエイト付けがなされ、既存の他の市民活動団体との連携も必要となります。ますます地域独自の個性が問われております。地域の行政との意見交換も双方の立場を尊重しつつ率直な形で実現しつつあります。恐らく平成18年度中に東京の地域会相互の連絡調整の場が必要になってくるでしょう。

都心の地域会は新しい地域会モデルとなりえるか

平成18年度は今まで空白地区であった千代田・中央・港の都心3地域という在勤会員が多く従来の地域会の考え方では活動しにくいブロックでの具体的な意見交換が行われようとしております。いずれも民間事業者の大規模事業が盛んな地域で個人会員の集まりであるJIAでは活動に限界があるといわれてきました。行政と一般市民も含めた地域の個性を我々建築家がどう感じ、どのような形でアピールしていくのが問われております。

東京地域会の今後は

既設の地域会も含め、現在立ち上がりつつある東京の地域会の年齢構成は、50代以上の比較的高い傾向にあります。一部30代の若い世代の会員の参加も見受けられます。新しく入会してくる会員には必ず地域会活動のガイダンスが実施され、様々な活動の場があることを伝える仕組みを構築することが重要です。年代的に実務から開放されつつある熟練した高齢層とパワフルな若年層とのカップリングが新たなJIA活動のエネルギー源となることでしょう。

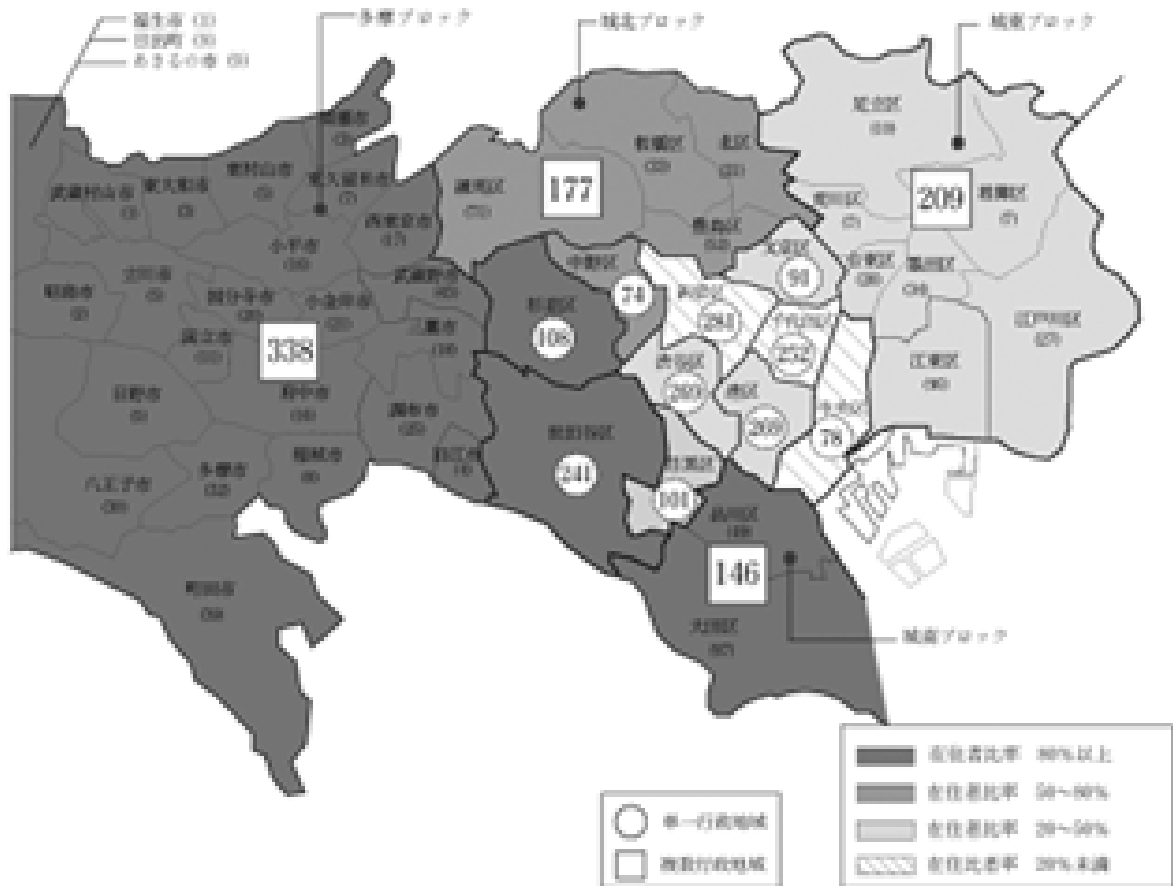
(株)中山建築デザイン研究所

東京都地域会会員分布図



※ 最立寄りのブロック以外は全てアンケート回答者(参加)の数
(二重枠表示)

東京都ブロック別会員分布図



新宿地域会（略称・JIAS）

その設立と初期活動報告



新宿地域会
広報担当幹事
渡辺 武信

設立準備会

東京における地域会は、2005年6月28日付けの松原支部長による「東京の地域会活性化」の呼びかけに応じて全域に拡がりはじめた。それ以前から中野、杉並、江戸川、三多摩などは活動していたが、新宿では8月4日に新宿区在住在勤の会員有志が集まったのが最初のきっかけだった。この席には松原支部長、中山副支部長（地域会担当）、先行する地域会の幹事などをゲストに迎えて話し合いが行われ、9月、10月と同様の会合を重ねた結果、10月半ばに、地域会そのものではなくその「設立準備会」が発足した。発起人代表は渡辺が、幹事を島が務めて、「設立趣意書」を作成し、区内在住・在勤の会員、200人余に郵送して参加を呼びかけた。

設立総会

「設立趣意書」の配布によって集まる有志の数も増える一方、さまざまな理由で参加を見合わせる方との区分も明確になった。見合わせる方でも、その理由が自宅のある地域会のほうに参加するためであるなど、アクティブな反応も少なくなかった。こうして11月、12月と準備会の会合を重ねる間に、話し合いで会長など後述の役員を暫定的に選んで、2006年1月に催された設立総会で提案したところ、全会一致で承認された。ただし顧問は候補に挙げられた古参会員が固辞されたので、とりあえず未定となった。

- ・ 地域会長：相田武文
- ・ 副会長：山下肇 / 小倉浩
- ・ 事務局長：島 義人
- ・ 幹事：渡辺武信（広報担当） / 亀井正浩（会計担当）
- ・ 監査：保坂公人 / 大野二郎

「設立は早急に、活動は徐々に」

新宿地域会に特徴があるとすれば「真面目にのんびり」ムードであろう。すでに他の地域会が活動している以上、新宿として名乗りを上げるのは早いほうがいいが、市民や行政との接触など具体的な活動は、区内のNPO法人や建築関連団体（事務所協会支部など）と摩擦を起こさ

ないように慎重に進めている。これは「趣意書」にも潜在していることだが、幹事を務めることになった会員たちの個性の反映でもあり、設立準備会も設立後の例会も午後4時から6時までで、以後は建築家会館のクラブ・バーで飲みながら歓談して相互に親交を深めた。4月からは「JIA館内の会議室より、なるべく地元で」という支部の要請も考慮して、例会を会員事務所のいずれかで午後6時から行うことになった。その初回の4月例会は21日に相田建築研究所の会議室で開催されたが、議事が終わった後は相田会長のワインをご馳走になりつつ、今後は酒肴を持ち寄ること、そのいわば「お土産」を提供できない場合はワンコイン（500円）のカンパをすることになった。また一部有志は高田馬場のバー「ALBERT」の二次会に流れた。ここは渡辺や相田の通いつけのジャズ・バーで、パスタやサンドイッチなどの軽食も出来る（地域会員へ：同店のTEL 3364-1441）。

具体的なボランティア活動

このように書くと飲んでばかりいるようだが、ゆっくりとであっても具体的な活動への準備は進めており、この日も「四谷駅前まちづくり協議会」「下落合みどりトラスト基金」という二つの市民運動のコア・メンバーと接触して、プロフェッショナルとしての助言や応援が出来ないかどうかを探索することになった。これは決して市民運動をリードするのではなく、あくまで後押しをするという姿勢においてである。こうして私たちは具体的な活動の端緒をつかんだところであり、その成果はいずれまた報告することになる。 (株)渡辺武信設計室



相田研究所における4月例会

つくば30年の検証

茨城大会実行委員長
内藤 彰

「つくば30年の検証 美しい街を未来へ」というテーマでシンポジウムを行なうには「つくば」を知ってもらう「資料」を作らねばならない。そこで資料集は「新都市つくば」が

- ・どんな環境の中に作られたか
- ・どんな意図で、どのような構成に作られたか
- ・それが今、どんな状況にあるか

が解かるようにと構成し、最後に「つくば建築マップ」を加えた。見学コースもこの順に、1日目は明治25年に発行された「大日本博覧図」にある、水海道「坂野家住宅」と、つくば市面野井の「高谷芳之助宅」を、午後は104軒もの登録文化財のある真壁の街並みを見学し、2日目は、筑波新都市記念館、洞峰公園体育館を、次いで、問題の空家の多くなった公務員宿舍地域と、筑波大学体育芸術学群中央棟を見てつくばセンタービル近くで解散し、午後につくば国際会議場でシンポジウムを行なった。

筑波大学体育芸術学群中央棟が無残な姿に改修された事件を知ったことが大会テーマを決めたきっかけであった。新装成った当時の筑波大学副学長室を初めて訪れた時、あの圧倒的に大きなガラスブロックの外壁が、戦慄を覚えるほど美しくキラキラと輝いて見えた。当時、副学長だった吉武泰水先生が「このガラスブロックは良いだろう。僕が決めたんだよ」と言われたことが思い出される。シンポジウムで、その体芸棟が、どんな理由で改修されたのかを尋ねたら、「冷房がなくて、9月はじめは40度にもなって暑くてたまらぬのが理由の第一であった」という。設計者の槇さんが「冷房がなかったのか」と絶句したというのを「そんなことも知らないで」と非難めいた発言があって思い出した。当時「文部省の規定では、教室には冷房を入れられない。しかし、遠くない将来には教室にも冷房を入れることがあたりまえになるだろうから」と決められたと聞いた。そう説得したのが吉武先生ではなかったか。前述の言葉はそのことと符号する。槇さんの絶句は、あれから30年もたっているのに、まだ冷房をいれてなかったのか、という信じられない思いであったのだろう。

大会を前にした早暁「あの言葉」に思いを巡らせた。あれほどに輝く、圧倒的な壁面は、後にも先にも他になかった。槇さんのイメージの中にあの美しさが輝いていて、吉武先生の眼力がそれを感知していたのであったと「あの言葉」の意味を合点したのであった。あれは新しい美の創出であった。その意味で「つくば」の秀れた建築群の中でも群を抜いて一番であったのである。その獨創性を何にもまして先生は大事にされたのだと思うのだ。創造性こそが新しい大学、筑波大学のシンボルにふさわしい、体芸棟は筑波大学のシンボルになると。

「つくば」は第一級の建築を失ったという落胆の気持ちは消しようがなかった。そんな気持ちで大会資料集の原稿を書き終えたとき、沸騰したお湯割のヤカンをひっくり返して足を火傷してしまった。包帯をとりかえながら、「待てよ、あれは全身火傷を負った絶世の美女か、火傷なら包帯がとれる日が来ればいいんだ」と気が付いた。

巨大な資本が一瞬にして増えたり消えたりするバーチャルがリアリティーになるような時代なら、ある時ある人が振り向けばなんでも出来るのではないかと、あの包帯をとってやろうと言う人が現れないかと夢想するのである。

昨今設計者の選定という大切な仕事の責任を回避することが公正であると思っているかの如き設計入札が横行している。責任の所在をあいまいにしている風潮が「あの建築を消してしまったのは一体誰なのだ」という事件を起こしてしまったのではないか。この事こそが今回またしても明らかになった日本の建築文化の世界の病巣である。

「かつて王様がいてピエロがいた。今、王様がいなくなった。ピエロこそ王様だ」とはピカソとの対談でのダリの言葉である。建築の世界にも「いまやピエロこそ王様だ」といえる日が来るのだろうか、格子のむこう側にいる「ゴルゴンの顔を見てしまった人たち」の無表情な顔を想像するのである。最後に、当日は大勢の皆様にご参加頂き、様々な問題が凝縮された「つくば」への認識を共有して頂きましたことに、心から感謝申し上げます。

(株)のあ設計事務所

JIA長野県クラブ

第15回学生卒業設計コンクール



JIA長野県クラブ
事業委員長

荻原 白

JIA長野県クラブは、3月12日(日) 学生卒業設計コンクール公開審査会を実施しました。

参加校は長野県内の大学1校、専門学校1校(本年は1校不参加) 高校4校の参加で、学内選抜を経た35作品会場一杯に出展されました。

審査委員は、宮本忠長審査委員長、私共JIA長野県クラブ会員から6名、群馬クラブより石川純男さん、新潟クラブより上山寛さんの9名で構成。

前日の夜には全作品(図面・模型)を審査会場に配置し、午後より公開審査会開始となるので、当日の午前中に各審査委員は出展された作品の下見を実施しました。1次審査は各自の作品前で待機している学生に、審査委員が直接ヒヤリングを実施。2次審査は持ち時間5分で、各人の作品をプロジェクターでプレゼンテーション。高校生はDVD・ビデオのプレゼンが中心でしたが、1校は直接ステージにて作品を持って説明しました。(ここまで2時間30分経過)休憩中に担当事業委員で最終審査の資料として各作品評価点を集計し最終審査に入りました。

最終審査では、1次審査/2次審査での得点上位5作品を中心に、審査委員と作者の学生を交えて活発な意見交換の結果、各部門(大学・専門学校・高校)の金賞、銀賞、銅賞、特別賞を決定しました。今回も1次/2次の合計得点が高かった作品が金賞となったのではなく、前述の様に全

員の合議でした。公開審査会ならではの緊張感を持った審査委員同士の遣り取りが、会場に詰めかけた学生および指導教官にとっても、新しい発見と勇気を感じたことでしょう。各部門の金賞は下記のとおりです。

・信州大学・山田 匠君「ヤマのふもとで」

・上田情報ビジネス専門学校・石川雅宏君
「自然の中で 生きる ということ」

・長野工業高等学校・萩原 創君「famiria 保育園」

今年も昨年以上に意欲的な作品が出展されたことは本当に嬉しい限りです。しかし、CADによる図面描き故か図面枚数が多く、1枚1枚の図面の密度が希薄に成っている傾向が今年は特にみられました。今年の反省として次回からは図面をA1判3枚程度と枚数制限して密度のある図面を求る方向に行きたいと思っています。

学生卒業設計はフィクションです。その発想、アイデア、考え方などを図面(模型)で表現します。審査委員は皆現役で活躍しているプロです。プロが1作品1作品丁寧に審査し、それを続けて15年。私たちは、これからもこうした「学生卒業設計コンクール」を継続し、社会貢献活動を通して若い学生たちに夢と希望を与え、自らの建築家の資質向上を図っていきたく思います。

宮本審査委員長、審査委員の皆様様終日お疲れ様でした。本当に有難うございました。(株)宮本忠長建築設計事務所



第15回が区政卒業設計コンクール審査風景

JIA群馬 「建築展」から「建築祭」へ 「学生卒業設計コンクール」+ 「学生課題設計コンクール」へ



JIA群馬
建築作品コンクール
実行委員長
石川 純男

当 会はこれまで毎年、一般の方々や建築に携わっている人々を対象にした事業「建築展」を行って参りました。これは、一般の方々に建築を身近に親しんでいただき、また建築に携わっている人々にはJIAを理解していただき、建築家の職能について周知していただくことを目的にしております。内容としては会の活動の発表や我々会員自身の近作発表、それにその年に選ばれた学生たちの優秀作品発表の場として、また建築にちなんだ講師をお招きしての講演会、建築相談会等々の事業です。

本年度13回を迎えた「建築展」は、これまでの作品発表中心の場から新たに「建築祭」とし、一般の方々や建築に携わっている人々が共に参加する場とすることにしました。会の活動内容の発表や我々会員自身の近作発表は従来通りですが、新たな企画として親と子供を対象にした「子供建築教室」、前橋工科大学生を対象にした「学生卒業設計コンクール」と北関東甲信越の学生を対象にした「学生課題設計コンクール」の街中での公開審査と講演会を中心にした、会員以外の方々が参加し共に楽しめる企画内容です。

「建築祭」は去る3月4・5日、前橋にぎわいステーションにおいて開催されましたが、好天にも恵まれ多くの方々の参加を得ました。「子供建築教室」は、建築の楽しさを知ってもらうための折紙建築とおこし絵による建築教室で、親子連れが終日楽しんでおりました。

本年度9回を迎えた「学生卒業設計コンクール」は、最優秀作品を群馬代表としてJIA主催「全国学生卒業設計コンクール」に出展出来ることとなり、全国的なコンクールの一翼を担うものとして充実して参りました。

そこで本年新たな試みとして、北関東甲信越地域の専門学校含む建築系大学に籍を置く在校生（3年生以下）を対象とした住宅系の「学生課題設計コンクール」を北関東甲信越のJIA地域会と共催して開催致しました。「学生卒業設計コンクール」が学業の集大成としての評価であるとするなら、「学生課題設計コンクール」は就学中の学生が建築への興味とその社会的な意義を認識し、学業への励みとすることを目的としております。

当初不安があった参加大学も6県より12校、参加作品は予定より多い42作品が集まり、学校関係者達の関心の高さが伺えました。当日は各県よりの出展者を始め、学校関係者、一般見学者など150名以上にも及ぶ参加者が見守る中で「学生課題設計コンクール」と「学生卒業設計コンクール」の公開審査が行われました。公開審査では審査委員長の青木淳氏をはじめ各審査員の懇切丁寧な講評に学生たちも目を輝かせて聞き入っていました。夜の表彰式、それに続く青木淳氏の講演会も会場に入りきれないほどの人で埋まり、盛りだくさんの内容で、多少スケジュール的にもハードではありましたが皆様のおかげで盛況裏に「建築祭」を行うことが出来ました。

今後、北関東甲信越「学生課題設計コンクール」は、各地域会、学校関係者などの意見をお聞きした上で、出来れば継続していきたいと思っております。

(株)核建築研究所



「建築祭」展示会場



「学生卒業設計コンクール」+「学生課題設計コンクール」公開審査



「建築祭」子供建築教室

こんな本を読みました

「まちづくり手帳
明日の生活技術と都市デザイン」



著者：北尾 克三郎
A4変型版 / 96ページ
2,300円 + 税
2005年10月5日発行
発行：マルモ出版

筆者は、商業施設設計に長く携わっている方ですが、活動の範囲は広く多面的で、そのまちでの暮らしや歴史的資産などの活用とデザインへの結びつけに日々悪戦苦闘しながら、都市と深くそしてなによりも楽しく関わってきたことが伝わってきます。その活動の中から生まれた都市を解説するメニューが圧巻で、時として曼荼羅的で難解なところもありますが、それはそれで眺めているだけで楽しくもあり、何かアイデアが欲しいとき、振り返って仕事を見直すときなどに、私はページをめくりまわす。 企業組合創和設計 / 櫻田修三

イベントセミナー情報

- 第15回東京都学生卒業設計コンクール2006**
会期：6月3日(土) / 公開審査：10:00-16:00
審査委員：長谷川逸子(審査委員長)・伊平則夫(副委員長)
中村勉・佐々木睦朗・阿部仁史
展示会：6月4日(日) 10:00-15:00
場所：工学院大学新宿キャンパス1階アトリウム / 入場：無料
内容：東京の4年制大学の卒業制作(46点)を対象に公開審査にて入賞作品を選考
- ミケランジェロ会・新宿プロムナードギャラリー展**
会期：6月3日(土) - 7月1日(土)
場所：新宿プロムナードギャラリー
(東京都西新宿2-21 新宿歩行者専用道・第1号線内)
「ル・コルビュジェ デジタルアーカイブの全容」
日時：6月15日(木) 16:00-18:00 CPD申請中
場所：建築家会館1階ホール(東京都渋谷区神宮前2-3-16)
講師：千代章一郎(広島大学工学部助教授)
下田泰也((株)Echelle-1代表取締役)
ピエール・スガン(仏：本プロジェクト
デジタル化担当ディレクター)
参加費：無料 / 定員：100名 申込：jia.jya@bpo.co.jp/

役員会議事録 / 臨時総会議事録は
ホームページに掲載の予定です
<http://www.jia-kanto.org/members/>

編集後記

5年にわたり支部の広報活動にたずさわりましたが、3月末をもって退任しました。JIAでいろいろな活動を行っていますが、広報委員会の活動はいちばんの激務です。でもそれは当然ですね。すっかり「広報」が身に付いてしまい、本を読めば意味を理解するよりも先に誤字脱字が目についたり、いつの間にかサイトにアップする情報を探してインターネットサーフィンをしてしまいます。「広報癖」が直るのはいつになるやら……。 (森岡茂夫)

編集作業中の今は、新緑の季節の真っ只中。木々から発せられるエネルギーが体に染み込むようで自然と元気が出てきます。個人も組織体もこの季節十分エネルギーを蓄え、大きく発展する年としたい。また、この春当委員会は、委員長はじめ4名の委員が任期を終えられ、新たに3名の方に参加いただくこととなりました。今までもまして、充実した内容の、皆さんに親しまれるBulletinを目指し、新たなスタートを切りました。

(山本信治)

編集：社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部広報委員会
委員長：中村 高淑
副委員長：近藤 剛啓・櫻田 修三
委員：大岩 義充・神田 雅子・久保 宏二・倉島 和弥・鈴木 利美
寺本 晰子・林 秀司・古池 廣行・本田 宣之・山本 信治
編集長：櫻田 修三
編集委員：大岩 義充・神田 雅子・久保 宏二・倉島 和弥・鈴木 利美
寺本 晰子・古池 廣行・山本 信治・菊地 良一
発行人：菊地 良一
発行所：社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA 館
TEL 03-3408-8291(代) FAX 03-3408-8294
デザイン：山口尊敏 / **印刷**：サンデー印刷社
©社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2006

JIA関東甲信越支部関連サイト一覧
(社)日本建築家協会(JIA) <http://www.jia.or.jp/>
建築家online(一般向け) <http://www.jia-kanto.org/>
JIA 関東甲信越支部(会員向け)
<http://www.jia-kanto.org/members/>
交流委員会 <http://www.jiakanto-koryu.org/>
保存問題委員会 <http://www.archiweb.com/jia-hozon/>
JIA 建築セミナー <http://www.jia.or.jp/kanto/seminar/>
住宅部会 <http://www.jia-kanto.org/jutaku/>
情報開発部会 <http://www2.bpo.co.jp/jia/>
都市デザイン部会 <http://www.jia.or.jp/kanto/ud>
メンテナンス部会 <http://www.jia-kanto.org/mente/>
中野地域会 <http://www.eva.hi-ho.ne.jp/jia-nakano/>
群馬地域会 <http://www.jia-kanto.org/gunma/>
長野地域会 <http://www4.ocn.ne.jp/jia-naga/>
神奈川地域会 <http://www.jia-kanto.org/kanagawa/>
千葉地域会 <http://www.chiba-kentikuka.jp/>
茨城地域会 <http://www.mfweb.net/jia-ibaraki/>

定価 300円(購読料は会費に含まれています)

広告 文化シャッター

広告
ヒガノ